

Pichari ~ピチャリ~

七飯町歴史館だより
第108号

ななえ古写真物語

VOL. 108

記録すること

謎の見晴館開業について
昭和40年代？
大沼公園広場



今も大沼公園では、冬になると「雪と氷の祭典」が開かれている。その始まりや経緯については、ピチャリ第26号にて「幻の雪まつり」と題して、書き綴っているので参照してもらいたい。

さて、この写真は、昭和40年代と思われるもので、雪山で作った滑り台で子ども達が遊んでいる様子を、親らしき人が撮影している風景です。現在なら、スマホやビデオで撮影しているといったところでしょうか。このように、大沼公園広場では毎年、滑り台や雪像を作って観光客を楽しませ（しかも、最近では滑り台も巨大化しているようです。）、冬の風物詩となっております。なぜか雪を見ると心弾んでいた子どもたちの時とは異なり、舞い降りる姿に目を奪われながらも、その後の雪かきのことを気にしてしまうあたり、年齢を重ねたのだなと思ってしまう今日この頃。ましてや、寒い中遊びに出かけるのが、億劫になりつつある自分を戒めている次第です。

時代が変わっても、かわらず季節は巡るものですが、周りの景色は目まぐるしく変わっていることを、見た記憶のない建物が映るこの写真を眺めながら強く感じました。

ところで、背景に写る建物に見覚えある方はどの位いるのでしょうか？ ガラス戸で覆われたかのような特徴的な外観。上部には「見晴館」の看板が掲げられ、一階には「みはらし食堂」の暖簾があることから、これが、現在の大沼展望閣（ちなみにこの2階のレストランの名が「レストラン見晴」）であると想像が出来るのですが、現在の印象が強いためなのか、まったく思い出せません。

見晴館は、大沼が公園として開発が進められていく明治38年以降に建てられたと考えられますが、七飯町史には、その名が記されているものの、詳細については触れてないなど、史料が少なく開業年月日は不明です。いろいろ調べてみると、前身は「見晴亭」と称し、大正4年1月の函館新聞に始めて登場しているようで、大正7年7月の函館毎日新聞では、改名し「見晴館」となったことが記されています。この頃の館主は相馬富治という人物で、昭和4年に開かれた駒ヶ岳登山会も見晴館主催のものでした。

このように、当町の旅館史についても、わからないことだらけで、調査を深めなければならぬことと、やはり歴史は文字で記録することが肝要なのだと痛感した一枚の紹介でした。

11日

歴史館友の会の皆さんに野草園の冬囲いをして頂きました。朝からの悪天候にも関わらず、作業のために集まってくれた皆さん。例年のこととはいえ、本格的な冬に入る前にこうした作業を丁寧に行っているからこそ、野草園の木々は春に元気な姿を見せてくれるのだと思います。

以前には、各家庭でも行われていた「冬囲い」もあまり見られなくなりました。歴史館では、一年を通して、こうした作業も大切にしたいと考えています。

本年もありがとうございました。



26日

今月のジュニア探検クラブは、町内の史跡や文化財を訪ねて周りました。聞いたことはあったけど、初めて行く場所、気になっていたけど、何の石碑かわからなかったもの。そんな場所を学芸員が解説をして町内を巡りました。

事前によくメモをとるように、と言われ、解説に耳を傾けるこども達。郷土の歴史や礎を築いた人を学び、どんなことが、印象に残ったでしょうか？

歴史館の冬の風景

今年もバードテーブルを設置しました。さっそくエサである、ひまわりの種をもらいに、文化の森から慌ただしくやって来ます。主に来るのは、カラ類でヤマガラ・シジュウカラ・ゴジュウカラなど。それぞれの鳥の特徴を覚えると、より愛着が湧いてくるので不思議です。もう一つは、今年からグリーンカーテンや館内に植物を増やしていますが、この冬は水耕栽培を密に行っています。ただ今、涼しい場所で根を伸ばして、成長しているところ。

1月の下旬頃から、観察できるよう準備中です。どうぞお楽しみに！



1月の予定	
1	日 年末年始休館日
2	月
3	火
4	水
5	木
6	金 特別展「デザインする土器」開催中
7	土
8	日
9	月
10	火
11	水 夜の博物館
12	木
13	金
14	土
15	日
16	月
17	火
18	水
19	木
20	金
21	土
22	日
23	月
24	火
25	水
26	木
27	金
28	土 ジュニア探検クラブ
29	日
30	月
31	火

12月31日～1月5日は休館です。

ワタ

野草園で育成していた二種類のワタのタネ。柔らかな繭のような姿です。学習室で観察できますので、ぜひご覧ください。



編集後記 ~tawagoto~

遠方へ出張中の時のななし。移動のため、地下鉄にのり、空いている席にすわる。一息ついた後、あたりを見回してみたら、下を向きながら携帯をいじっている人が多いことに気付く。

普段、公共交通機関をあまり利用しないので、その都会的な光景は新鮮だったが、反面、つまらなくも感じた。私はおもむろにカバンから文庫本を取り出し、文章の森をさまようことに。デジタルでは味わえない隙間の時間があった。（やまだひさし）

~ピチャリ~
Pichari 第108号

平成28年12月20日発行

七飯町歴史館

〒041-1193 亀田郡七飯町本町6丁目1-3

電話 0138-66-2181 FAX 0138-66-2182

E-mail: rekishikan@town.nanae.hokkaido.jp